

野に仏・里に仏

大谷 眞

最後の旅・その一
鉄鉢の中へも霰

1995年1月4日 雨

昨日夕刻、自宅を出て大阪南港へ向かい、22時40分発の新居浜行きのおレンジフェリーに乗る。前回四国から乗船した東

予港はひとつ手前の寄港地となる。正月休みの終わりとあって、フェリーはかなりの混雑となった。

フェリーを降り、前回の逆コースをたどって、ほぼ2カ月ぶりの「伊予桜井」駅に降り立った。外は雨だ。今回は、第八十八番大窪寺まで、一気に参加りしたいところだが、仕事の都合で、どうしても途中、一旦帰阪しなければならぬ。

駅の待合室でカッパを着込む。今回新兵器のゴアテックスのレインウェアだ。冬場の雨対策と防寒を考え購入した。以前のポンチョでは、背中

ザックごと羽織れる、という利点はあっても、足元やサイドからの濡れは避けられなかった。それに山道や風の強い日では、裾がバタつき苦労させられた。

ザックにレインカバーを取り付け、エイツ、とばかり雨の中に飛び出した。まとわりつくような霧雨だ。時刻はやつと午前6時をまわった所。外はまだ真つ暗である。

2時間ほど歩き、今日の予定の分岐点にきた。次の六十番横峰寺へは、この雨とあって足元に不安があった。なにしろ石鎚山の中腹に位置する、四国霊場における難所のひとつである。一つの選択として、六十一番香園寺、六十二番宝寿寺、と打ち進み、明日、六十一番まで1キロあまりを引き返した後、香園寺横手から

の山道を登る方法がある。ただ、このコースだと、横峰寺からの復路は、車道を六十三番吉祥寺まで戻らねばならない。本来なら、この分岐点のついで先にある、妙雲寺横から登り始め、横峰寺を打ってから六十一番まで下る道のほうが、往路、復路とも自然豊かなコースが予測出来る。が、この雨と、本日スタート位置からの距離を考えれば、かなり無理があるように思えた。結局、山にかかる雲の厚さに負け、ここから直接六十一番へのコースをたどることにした。

何のへんてつもない車道を黙々と歩く。1時間ほどで香園寺の標識を見つけ、右に折れた。山手に、美術館のような近代的な建物が見え始め、やがてこれが六十一番香園寺とわかりアツケにとられる。噂どおりだ。さらに1キロほどを歩き、次の第六十二番宝寿寺で参加りを済ます。ここを本日の打ち止めとした。

予約を済ましておいたすぐ近くの「ビジネス旅館小松」へ向かう。しかし、玄関をがらりと開け

でも返事がない。よく見ると、3時から受け付けます、とあった。仕方なく、時間つぶしに隣の散髪屋に入った。四国での散髪も4回目となった。「お隣は本業が肉屋だから、昼間は誰もいませんよ。」

物腰静かなご主人が教えてくれた。

「なあに、じきに帰って来ますから・・・。」

独り言のように付け加え、ジョキジョキとハサミを使い始めた。ヒゲソリに入ったところ、どこかの奥さんが顔をあたりに

来た。二人で何やら話に花が咲くの聞きながら、どうもこの辺りから眠ったらしい。目が覚めてからシャンプー。もしかして眠らせておいてくれたのだろうか？

3時過ぎ宿へ戻ると、女将さんが出て来られ、ほっとする。すぐに風呂を沸かしてくれた。夕食は山のように(文字通り、山のように)出た。

「お一人だけだから、ゆっくり召し上がってね。」

通された床の間付きの別室で、のつこつ、なんとか平らげた。と思ったら、

後からまだ茶わん蒸しが出た。

1月5日 曇りのち晴れ
朝食後、荷物をまとめ出発。女将さんは玄關まで出てこられ、香園寺までの近道を教えてくれた。時刻は7時。既に充分明るい。

今日は白衣を着た。白衣の下はトレーナー。一番上に防寒をかねてカッパを着た。手袋をして歩きだすと、ちょうどよい心持ちだ。昨夜の風は収まったとはいえ、寒さはいぜん厳しい。2キロ弱



戻って、香園寺横から標識を右に入る。まもなく香園寺奥の院が現れ、ここから山道にかわった。横峰寺まで6.9キロ、と標識が示している。

ぐんぐん高度を上げる。途中から尾根道となった。昨夜からのうつつとしい曇り空も切れて、薄日もさし始め、気持ちも和らいで行く。さらに歩くと急に前が開け、まだ低い雲に覆われた山々が見え始めた。足元にはうつつすらと雪が積もっている。そのうち、さらさらと白いものがちらつき始めた。

細い舗装道に出た。地図で見ると、横峰寺から吉祥寺に抜ける車道らしい。道のはたに、雪の結晶の付いた樹々が、日を受けてきらきらと輝いていた。カメラに収めていると、初老の男性に声をかけられた。上下正装のお遍路さんで、手には数珠を持たれている。

「お歩きですか？」
「はい、そちらも？」
「いえいえ、私は車です。この少し下に車を止めて登って来ました。」

今日は雪のため、来る

前に横峰寺に電話して道路の様子を聞かれたとのこと。

「いつもならこの時期、雪は当たり前なんですよ。が・・・。」

「何度もお参りされているんですか？」

「私は高知ですから、車を使えば、二日もあれば結構まわれるんです。1年で、ひとまり半はできますから・・・。」

年中、四国各地をまわられている様子だ。今日、本来なら登りたかったコースもよくご存知のようだった。

雪は次第に積雪を増し、足元をとられるようになった。数人の団体のお遍路さんが、次々と道を下って来る。

「おお、寒む！ご苦労様です。お寒いですねえー！」

いかにバスでのお遍路でも、お寺に横付け、という霊場ばかりではない。

登りきった横峰寺は、雪の中でひっそりとたたずんでいた。同行の男性と別れ、境内の写真を何枚か撮る。お参りをしてから、納経所に向かうと、急に寒さが体中を襲って来た。登坂の途中、暑さの

ためカツパを脱ぎ、白衣の下にトレーナー一枚、という軽装のままであることを忘れていた。緊張が解けてから、急激に体温が下がったのだろう。あわてて着込んだが、震えが止まらない。納経所で声を出そうにも、震えて出て来なかった。ここで大休止して食事をするつもりだったが、早々に引き返すことにした。

2時間近くかかって「横峰寺登山口」のバス停にまでたどり着いた。この先を左手に取り4キロほどで国道に戻った。ここから公衆電話で「湯之谷温泉」に宿をキープした。国道を少し戻って第六十三番吉祥寺でお参りを済ます。後は国道を避け、並行した民家の間の道をとって次の霊場、第六十四番前神寺へ向かった。

途中から赤犬が一匹、トコトコ付いて来た。なにかねだるでもなく、前になり後ろになり、時々道草をしながら一緒に歩いている。首輪が無い所から見ると野良犬だろう。道々で飼い犬にほえられ、



そんなときはぴったりと私の側に寄り添って来る。

前神寺の境内に入ったところ、かわいそうだが赤犬とも別れた。中までついてはこさせられない。お参りした後、探してみるのがはや姿はなかった。また誰かを見つけて、四国をトコトコ歩き続けているのだろうか？

今日は1キロほど先の「湯之谷温泉」に投宿。棟を違えて宿泊も可能だが、本来は地元の社交場、といった感じだ。硫黄の匂いのする温泉にゆったり浸かり、8時前には早々

に床についた。

1月6日 曇り時々雪

7時からの朝食なので、今朝はゆっくりと布団の中で過ごし、6時にえいっと飛び起きた。洗面に出ると、

「雪が降ったらいいですよ。」

と、同じく顔を洗いに来ていた同宿の男が言う。数人のグループで車を使い、お遍路をされているようだ。確かに雪道なら車も楽ばかりではあるまい。

7時半、宿を立つ。外は

昨日より冷え込みが厳しい。行く手の空は雪雲が低く垂れ下がりがり、おどろおどろしい。ぱらぱらと霰も落ちて来る。

「鉄鉢の中へも霰」山頭火の句が思い浮かんでくる。今なら彼が感じたであろう、この道の先に続く、不安と安堵が同居した二つの相反する世界が私にもわかる。この一句の中の、彼の祈りが、絶望が、そして身を捨てたゆえの安堵が、痛いほど伝わって来る。結局、写真も一つの句。同じ心の体験がなければ、誠の共感など程遠

い気がする。

第六十五番三角寺までは六十四番から45キロ先となる。今日中には無理としても、本日はどの辺りまで歩けるだろう。結願までの間に、いったん帰阪せねばならないと言うあせりが、つい足を速めさせてしまう。

国道11号と並行した民家の間を延々と歩き続ける。と、向かいから自転車をつきながらやって来た老人が、あわてて自転車のスタンドを立て、声をかけてくれた。

「お遍路さん、お接待させていただきます。」

もどかしそうに、彼は手にしていた封筒からお金を取り出そうとされている。近くの郵便局が農協で降ろしてこられた帰りなのだろう、ありがたいが、申し訳ない気持ちがいかに先立ってしまう。よりによって、こんなところで、私のようなお遍路もどき「に出会つとは・・・。封筒から、と言うことは、もしかや、と思つていたら、あんのじょう、「あは。」

と千円札を渡された。硬貨ならともかく、お札を

頂くのは初めてだった。多いに躊躇したものの、これは私にはなく、あくまでお大師さんへのお供え、と自分に言い聞かせ、ありがたく頂戴した。

そのまま立ち去ろうとする彼をあわてて呼び止め、納札を差し出した。彼はそれを押し頂き、大切にうに封筒にしまわれた。

「失礼ですけど、ご主人もお四国をまわられたことあるんでしょうか？」

お接待を戴く方は、自ら四国をまわられた方が多い気がする。ひとつとは思えないのだろう。

「ええ・・・。ついこの間まで、六十番さんにお勤めさせてもろてましたんですが、家内に先立たれてから、今、実家のほうに帰ってきとります。」

自分もまたいつか歩いてみたい、と言われてから、

「どうかこの先、気をつけてお参りください。」

そう言い残して、自転車を引きながら行ってしまわれた。あの方から、千円も戴いてよかったのだろうか？それとも奥さんのための良い供養になったのだろうか？複雑な気持ち

ちでその後ろ姿に手を合わせた。

途中で予約した「ろんどん壮」には5時前に到着する。気の良さそうな女将さんが向かえてくれた。ただし電話でも言われた通り、今日は夕食は無い。全室畳の入れ替えで、それどころでは無かったようだ。おかげでイグサの香りのぶんぶんする部屋に通された。すこぶる清潔な宿。お風呂も洗面もピカピカに磨き上げてあった。こういう宿は、ホントに得をした心地になる。

女将さんに教えられて、斜め前のスーパーで買い出しをして、簡単に夕食をとった。お風呂と洗濯を済ませ、いつものように早々に床についた。

1月7日 曇り

一晩中、何か大変な夢を見ていたようだ。何度も何度も夜中に目覚め、また眠りに落ちた。何の夢か具体的に思い出せない。戦争か大規模な破壊の中にいたような気がする。

目が覚めて、寝過ごし

た、となぜかすぐに分かった。時計は5時半。今日は朝食の無い分、早く出立しようと思っていたのに、このさまである。大慌てで着替え、部屋を片付け、パンをかじり、洗面を済ませて、それでいて少し余裕を感じながら宿を出た。6時だ。外はまだ真つ暗。道はそのうち山手に向けての登りとなつた。

らは、「椿堂」と標識のある方向に下って行く。昨日に続き、足が痛んだ。当初のころのまめではなく、関節と筋の痛みである。山を下り切って、国道192号線に合流する手前に「椿堂」はあった。先を急ぐので簡単にお参りを済ました。ふと見ると、出入り口近くに「おさわり大師」とあり、

い、そう思いながら、痛む右足が少しでも楽になれば、と大師像の足に触ってみた。それから急に、自分で信じてもいなく、せに、と恥ずかしくなり、そのまままた歩きだした。歩きだして、それでも、とまた思い直し、全く期待もせず、左手で痛む足を触ってみた。ところが、暖かい感触がして、なんとかの痛みがすっと消えたから驚いた！痛みはしばらく歩くとまた戻っては来たものの、また触ると、今度は少しだけ軽くなる。どうも良く分からない。

途中、何度か道に迷つたものの、8時には第六十五番三角寺に到着。人影はなく、曇り空とあつてかなり寒い。三角寺か

「右手でお大師さんを、左手で自分の痛む所をさわり、お願いする。」との趣旨が書かれていた。信心深い方なら、確かに奇跡もあるのかもしれない。



やはりお大師さんの功德なのだろうか？何とも不思議な体験だった。

後は単調な国道を黙々と歩き続け、雲辺寺口辺りから登山道にとりかかった。六百メートル以上の標高差を2時間近くかかって登りきり、やつとの思いで第六十六番雲辺寺の境内に出た。ここは麓からのロープウェイがあるせいか、若い人の気軽な服装も目立った。

参拝後、ここで次の第六十七番大興寺近くの宿「おひら」を予約。あたふたと売店横から下る。落ち葉

の積もった快適な山道だ。整備もきちんとなされていた。ただし、道は延々と下り続け、そのうちとうとう足が笑い始めた。途中休憩していると、完全装備のマウンテンバイクの男が、この木の階段を駆け降りて来たのには驚いた。

ようやく麓に下りると時刻は3時半。ここから6キロ程で大興寺だ。もしかして5時までに着けるのでは、とふと思う。今日中に打つことが出来れば、明日はかなり早く宿を出発できる。そう思うと急に足が速くなった。足の痛みもどこへやらで、

音がして、納経所への木戸が閉じられる気配がした。あたりは既に人影も無い。既に薄暗くなった本堂と大師堂で、一人、ゆっくりとお経を詠んだ。終わってからもしばらく、ほうけたようにベンチで空を見上げていた。



飛ぶように（と本人は思っていたが、見る人にはさぞこっけいな姿であつたろう。）歩く。

結局2分前ぎりぎりに大興寺の境内に滑り込んだ。まずは納経所で記帳を済ませ、後は境内のベンチにへたり込む。精根尽きた感じだ。こつと、と